

# London 「美術館」 探訪記

## ～ National Gallery の「今」を見る～

池田 勝彦

### 1. はじめに

博物館の紀要に「美術館」について寄稿するのがよいのかどうかについては悩んだが、著者はすでに、Londonにあるいくつかの博物館(大英博物館は恐ろしくて対象にしていないが)の探訪記については本誌に報告をさせていただいている。そこで、今回は「美術館」の探訪記にしてみようと思ひ至り、Londonにあまたある美術館の中から National Gallery を訪問することにした。

Londonには、表題にある National Gallery、それに隣接する National Portrait Gallery、Tate Britain、かつての火力発電所の建物を再利用した Tate Modern がある。National と Tate が、規模や展示物の価値からも London を代表する美術館であり、両美術館ともかつての大英帝国の威容を国の内外に示す役割を担っていることもあり、“Admission Free”であることから National Gallery の「今」を見ようと思った次第である。

### 2. National Gallery の位置するところ

さて、National Gallery の立地であるが、National Gallery は、かの有名なネルソン提督の像がある Trafalgar Square に面して建っている。Trafalgar Square は中央部が噴水となっており、ネルソン提督(図1)が立つ塔頭は、4匹の大きなライオンに囲まれる形でその隣にある。南側には Big Ben (改修工事をしているとの情報有)を眺めることができるポイントもある。いつ訪問しても工事中的のエロス像(図2)のある Piccadilly Circus からも、わりに近い場所である。観光にはうってつけの界隈である。また、交通の便もよい。この広場の最寄り駅は地下鉄の Charing Cross 駅で、Musical Theatre の多い Leicester Square 駅からも比較的近く、両Tateと比べてもなかなかよいLocationである。

### 3. National Gallery とは

National Gallery とは、イギリスの国立美術館



図1 トラファルガー広場に立つネルソン提督像



図2 囲いの中のエロス像、いつ工事が終わるのだろうか。

である。創設の経緯についても少し説明しておく。ただし、すべてはショップで買ったガイド・ブックの受け売りであることをお許しいただきたい。

National Gallery は1824年に設立され、1200～1900年代までの絵画を、2300点以上を保有している世界的レベルの美術館の一つである。パリのルーヴル美術館は1793年に設立され、スペインのプラド美術館は1785年に博物館の予定で設立され、1819年に開設されている。しかし、

そのころの「大英帝国」には、博物館としては British Museum はすでに設立されており、アンティークな美術・工芸品を収集していたが、絵画を中心とした美術館は欠けていた。Gallery の設立の出資者たちは「大英帝国」にも由緒あるマスターピースを常設する世界的な美術館を渴望するとともに、国家の威信でもあったと考えていた。さらに、出資者たちは次のように信じていた。この美術館の建設は過去の偉大な美術品が若手の芸術家を奮起・鼓舞し、学習のための上質の例となる。さらに、このような機会を与えなければ会うことがない人々に気安く上質の「文化」を与えられることができる。

ガイド・ブックの内容であるので、すべてを鵜呑みにできないかもしれないが、「英国」=「啓蒙思想」の流れにあるように思える。未開人に見せてやるぞとのスタンスは気に障るが「入場無料」はやはり魅力的ではある（館内には寄付金用の透明のボックスが用意されている）。

また、館内には、お土産ものの販売店だけでなく、カフェ・レストランも充実している。このカフェはイギリス伝統の English Breakfast の美味しい有名店の一つにあげられるほどだというから本格的である。休憩がてら立ち寄るのも一興だろう。

#### 4. 展示室の様子やいかに

私個人の習慣ではあるが、私が美術館で取るお決まりの行動パターンがある。美術館を訪れる際の私の解釈は、あくまで「絵を見ること」が目的であると考えているため、まずは、“速読的な”速さで、できるだけすべての絵・彫刻等を見ることにしている。この段階では、説明文等はほとんど見ないで進む。よって、かなりの早さですべての展示を見終えることができる。しかし National Gallery のような大規模な美術館になると、そうもいかない。そこで、すべてを見て全体を把握することは無理なので、あまり欲張らず、何回も足を運ぶことを前提にして、全体をいくつかに分け、その一部分を見ることにしている。見る順としては、展示品の中の比較的新しいものから古いものへと進めていくことにしている。このような見方をしているのだが、今回の National Gallery 訪問は二十数回目となるので、さすがに時代を問わず隅々まで見

ることができているはずである。しかし、不思議にも訪れるたびに何かしら新しい展示品に出会うように感じるのは、展示品の豊かさゆえんだと感じ、面白い。

#### (1) ソファとロープ、そしてガラスケースが無いということ

さて、いよいよ入館である。ややもすると入館ゲート付近の展示品に目を奪われがちであるが、今回も事前に考えていた目的のエリア（今年1800～1900年代の展示群である）に向かい、小走りよりもさらに速めの速度でそのエリアの展示品をすべて見まわった後で、見たいと思う展示品を決めた。その絵画作品をじっくり見るために、ソファに陣取った。これもいつもの習慣である。そしてその作品を見ながら同時に、つい、展示物を見ている人たちも観察してしまう。それがなかなか面白いのである。例えば、そこまで近づくかというほどに作品に接近し、熱心に筆運びを観察している人がいるかと思えば、一方で、作品を見るよりも解説ばかり読んだり、その作品の写真をとってばかりだったり、その作品を見ている人をながめてばかりの人もいる。実に様々なのである。

このような多様な作品の鑑賞のしかたが可能なのは、この Gallery の館内には、作品と入場者を隔てるものがほとんどないからであろう。あるのはせいぜい大人の膝の高さ程度のロープのみなのである（図3）。それ以外何の障害物もなく、これだけである。したがって、かなり近づくことができるので、筆遣いやそのタッチまでも観察可能である。例えば National Gallery 所蔵の有名な作品であるピカソの“Motherhood”（1901年）を図4に示す。ピカソは母子像を多く描いており、そのなかの一つである。このピカソに関する解説は筆者の能力を超えているので省略することをお許し願いたい、ここで確認していただきたいのは、このような世界的な名作であっても、防御するガラスケース等が無いという点である（一部の作品はガラスケースに入っているが）。

名画と呼ばれる作品は、往々にして額にガラスが入っていたり、そうでなくともガラスの陳列ケースにおさめられていたり…。これが一般的な美術館で見る光景である。たしかに、展示品を手の触れる状況で置けないものももちろん



図3 1800～1900年代の作品の展示室、ロープのみで保護している。



図4 ピカソの“Motherhood”、ガラスが無い

あるので、その場合、陳列ケースに入れるのは納得するが、絵画はそれでは困らないだろうか。照明が作品の表面を覆うガラスに映り込んだり、見ている当人の顔が映ったりということはよくあることだ。

これは絵を見ることの致命的な障害ではないだろうか。多くの美術館でガラスに入った名画に会うが（今夏訪れたオルセー美術館でさえそうだった）、これは改善すべき点であると思うが、いかがだろうか。

このような、各フロアに作品鑑賞のためにゆったりとしたソファが置かれていることや、シンプル極まりない作品の前に設えられたロープの囲い、ガラスを介さずに作品を見ることができ館内環境を見るにつけ、この美術館が若き芸術家のみならず芸術を愉しむことのできる子どもたちを育てるといった目的を明確に持っている美術館であると感じる。かしこまらずに芸術作品を間近に見ることができる。これほどまで

に、芸術に慣れ親しむことができる環境は少ないだろう。また、許可を得さえすれば、作品の模写が館内の作品の前でできることから明確である。これまで何度も訪問する中で、時折、模写をしている若者を見かけることがある。美術を専攻する学生であろうか。また、小学校の児童が床に座り、引率の先生や Gallery のスタッフの話を聞いたり、作品を模写したりしている姿に出会うこともある。思い巡らせてみると、このようなワークショップ的な活動は美術だけでなく、音楽の分野でも活発である。例えば、バービカン・センターをレジデンスとするロンドン交響楽団（LSO）では、子どもたちに思い思いの楽器を持ってきてもらって LSO と一緒に演奏するファミリーコンサートや、ロイヤルフェスティバルホールをレジデンスとするオーケストラの団員による青少年向けの多種多様なワークショップが行われている。もちろん、大英博物館においても多くの子ども向けのワークショップは開催されている。これらのことから考えると、イギリスの芸術文化に関わる施設は、芸術文化を身近なものとして嗜める素養を涵養することを使命として、至極当たり前に受け止め活動をしていると感じる。2018年夏に久しぶりに訪れたルーヴル美術館は、人・人・人であふれかえり混沌としていた……。

## （2）作品は自然光で

National Gallery 館内の照明は、「自然光」を取り入れることに重きをおいている（図5）。ただ、イギリス、特に London は曇りの多いお国柄ではあるので、照明機器の併設は不可欠である。それらは天井に一見無造作に取り付けられている（図5）。

しかし、無造作には見えるが、空間すべてをこうこうと照らすのではなく絵にのみ照明が当たるように配慮されている（図5）。ただ、すべてにおいてその配慮がいきわたっているというわけではない。例えば、図6では、モネの「睡蓮の池」の左隣に上下2段の形で展示されている2点の作品である。照明がぎりぎりではあるがうまく当たっていないように見える。この上下2段の作品の下のほうの作品は「ウエストミンスター脇のテムズ」という作品であり、ロンドンに由緒ある作品であることを考えると、この状況は少々、惜しいようにも思える。



図5 展示場の天井と照明



図6 図5と同展示場の照明状況、上下2段組の絵画で照明の影

### (3) お気に入りに出会えず

私の National Gallery におけるお気に入りの作品は、“The Execution of Lady Jane Grey” (<https://www.nationalgallery.org.uk/paintings/paul-delaroches-the-execution-of-lady-jane-grey>) である。私にとっては、とても「綺麗な絵」だと感じる作品であるのだが、周囲からは、ホラー好きが高じたものだと思われる作品である。訪れるたびに、目的とするエリアをまわった後、必ずゆったりと見るようにしていた。ましてや今回は、National Gallery 訪問の目的が、本稿執筆のためであったこともあり、このお気に入りの作品について何か書ければと、いつも以上に鑑賞することを楽しみにしていた。しかし、記憶を頼りに館内を探しまわったが、このお気に入りの作品が一向に見つからない。約1時間探し回ったが見つからないので、英語力の問題から気が進まなかったのではあるが、館内のスタッフに思い切って尋ねてみた。すると、

JAPAN か USA に移転されてしまい、現在は館内に無いとのことであった。非常に残念であった。後でその作品の行き先について調べてみると、アメリカ・ヒューストンの美術館で展示されていることが分かった。スタッフの説明から受けた印象では「もう戻ってこない」というものであったので少々気掛かりである。ほかの貸し出し中の作品の場合は、その作品が飾られていた場所に「貸し出し中」の掲示があった。しかし、私のお気に入りの作品は、展示場所自体に別の絵がかかっており、もちろん「貸し出し中」の掲示もなかった。これには、かなり寂しい思いをしながら帰途についた。

なお、この私のお気に入りであるこの作品は、中村京子氏の『怖い絵』という本に取り上げられ有名になった「絵」でもある。ただ、作品としての評価はあまり良いとは言えず、技巧の勝った作品であり、それ以上でもそれ以下でもないとのことなので、ひょっとしたら手放すに至ったのであろうか。

## 6. まとめにかえて

今回は、LondonのNational Galleryについて、筆者の心にうつる個人的な思いにまかせて書かせていただいた。関西大学博物館の阡陵に相応しい内容かどうかはかなり疑問であるが、この原稿を読んでいただいた方の中から、National Gallery に行ってみようかなと思われる方がお一人でもおられれば、筆者の目的とするところは達成である。

National Gallery はれっきとした英国立の美術館ではあるが、比較的規模の小さいこぢんまりとした美術館であるので、大英博物館やフランスのルーヴル美術館のように、「時間が足りない」と焦りつつ慌しく見まわることはない美術館である。Londonを訪れる際には是非とも足をのばしていただければと思う。

なお、National Gallery 以外の美術館としては、英国を代表する巨匠ターナーの作品が多く展示されている Tate Britain と現代美術を積極的に展示する Tate Modern があり、こちらに関して入場無料であるので、お勧めしたい美術館である。

博物館運営委員 化学生命工学部教授